

平成24年度八重山群島病害虫発生予報第3号(6月予報)

I 6月の気象予報

向こう1か月の平均気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	平均気温	降水量	日照時間
高い(多い)	40	40	30
平年並	30	30	30
低い(少ない)	30	30	40

(平成24年5月25日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
八重山群島(石垣島)	28.0	30.4	26.1	206.6	208.7

(沖縄気象台発表・統計期間1981～2010・資料年数30年)

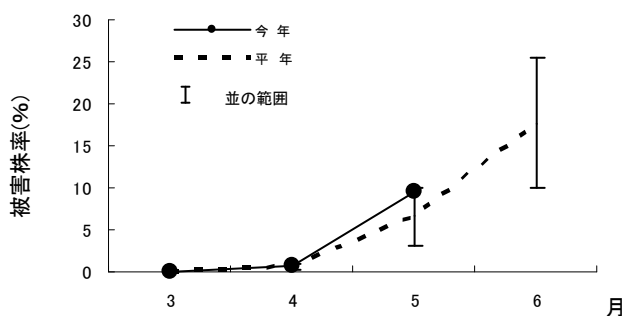
II 6月の発生予報および防除上の注意事項

1 水稻(一期作)

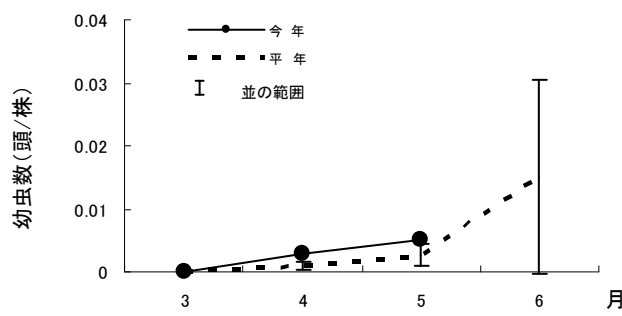
(1) コブノメイガ

発生程度 : 並
予報の根拠

5月中旬の調査の結果、被害株率は9.4%(前年3.0%、平年6.6%)と平年並で、株当たり幼虫数は0.1頭未満(前年0.1頭未満、平年0.1頭未満)と平年よりやや多かった。



水稻におけるコブノメイガの被害株率の推移



水稻におけるコブノメイガの発生推移

<防除上注意すべき事項>

- a 発生状況は水田毎に異なるので、見回りを徹底し発生程度を把握した上で防除を行う。
- b 例年二期作で発生が多くなるので、一期作で発生が多い水田では防除を徹底する。

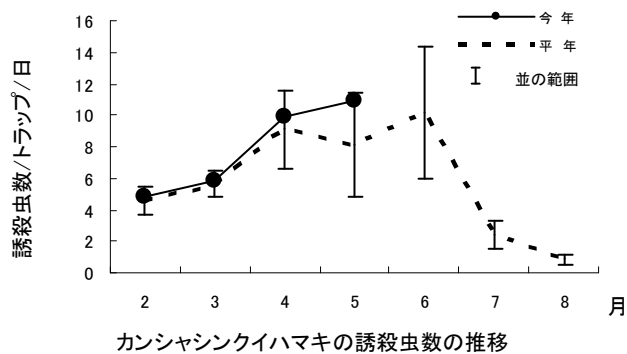
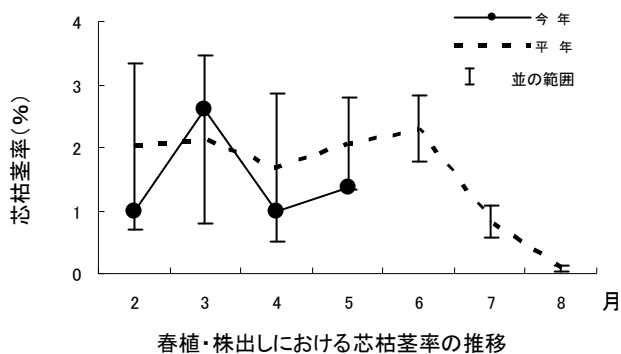
2 さとうきび

(1) カンシャシンクイハマキ

発生程度：並

a 5月下旬の調査の結果、春植・株出圃場における芯枯茎率は1.4%(前年1.2%、平年2.1%)と平年並であった。

b 5月のカンシャシンクイハマキ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は10.9頭(前年5.8頭、平年8.1頭)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

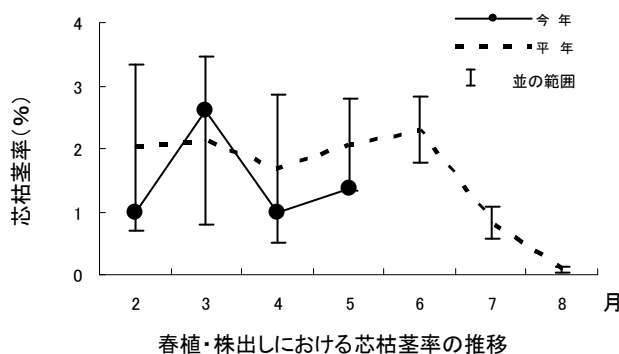
- ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、生育初期の防除を徹底する。
- 圃場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- 培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。
- 平成24年度病害虫発生予察技術情報第1号参照(平成24年4月5日付)。

○ イネヨトウの防除対策

a 5月下旬の調査の結果、春植・株出圃場における芯枯茎率は1.4%(前年1.2%、平年2.1%)と平年並であった。

b 5月のイネヨトウ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は1.4頭であった。

c 与那国島において、イネヨトウの被害が多発した際の誘殺虫数は2頭以上であった。



<防除上注意すべき事項>

カンシャシンクイハマキの防除上注意すべき事項を参照。

○ サキシマカンシャクシコメツキの防除対策

a 5月の合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たりの誘殺虫数は0.2頭(前年0.8頭、平年1.0頭)と平年より少なかった。

b 更新圃場は速やかに古株などの残渣を処理し、植え付けまでに数回耕耘して幼虫密度の低減を図る。

c 培土時に他の土壌害虫の防除も兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。

d 翌年の株出し不萌芽を防ぐために、卵が孵化した頃(5~6月)に株元に薬剤をかん注する。

2 マンゴー

- 炭疽病の防除対策
 - a 5月下旬の調査の結果、一部園地で発生がみられた。
 - b 罹病した葉や枝、摘果した果実等は施設外へ持ち出し処分する。
 - c 収穫果実への被害軽減のため、袋がけ前までの防除を徹底する。
 - d 果実肥大～成熟期は、治療剤を選定し、定期防除に努める。

- チャノキイロアザミウマの防除対策
 - a 5月下旬の調査の結果、発生はみられなかった。
 - b 不要な新梢は本種の発生を助長するので、早い時期に摘除する。
 - c 発生源となる施設内外の雑草を除去する。

3 オクラ

- うどんこ病の防除対策
 - a 5月下旬の調査の結果、発病葉率は16.0%(前年14.4%、平年10.9%)と平年よりやや高かった。また、一部圃場で多発生がみられた。
 - b 老葉や病葉は発生源となるので、圃場内に放置せず、ビニール袋等に入れるなどして持ち出し処分し、透光通風を良くする。